

ここまでの胃がんの個別化治療

胃がんと一言にいてもできる場所や、組織型、進行度などにより、大きく治療方針はかわってくる。以前であれば、そういった治療法も多くなく、胃がんになると、手術をして治す。もし治らなければ、そこで寿命を迎えるといった状況であった。

近年、医学の進歩とともに、胃がんの治療法も日々進歩し、手術以外にも様々な選択肢ができてきた。

例えば、早期のものであれば、もはや大きくおなかを開けて行っていた手術も、いわゆる胃カメラを用いて切除する EMR や ESD といった方法で治療が得られるものも出てきた。

また、手術に関しても、開腹手術以外にも、腹腔鏡手術や、最近ではロボット支援下手術も登場し、手術治療に関しても変貌してきている。上記は手術に対するアプローチであるが、実際に胃の切除範囲に関わるもの、すなわち、術後の食事などの QOL に関わる胃の機能を温存するような術式も出てきた。

これらの、手術は誰しものが希望すればできるというものではなく、やはり、癌ができた場所や進行度にあわせてオーダーメイドで治療法を考えるべきである。

また、抗がん剤に関してはさらに、様々な治療法が出てきており、選択に迷うことも多い。癌の状態や、抗がん剤を受けられる患者さんの状態等を考えながら、できる治療を行っていくこと、さらに使用できる薬剤を可能な限り効率よく使用することが肝心である。

胃がんに対する治療は、選択肢が多くあり、その都度、一緒に一番いいと思われる方法を行っていくことが重要である。